



会場：東京大学駒場図書館

1階展示コーナー

会期：令和元年7月1日(月)

～7月15日(月)

東京大学教養学部創立70周年記念展示

# 一高校長時代の狩野亨吉

## — 教養学部前史として —

駒場図書館所蔵の狩野亨吉文書のうち、今年が教養学部70周年であることもふまえ、特に一高校長時代の事績がうかがえる資料を中心に展示・紹介します。

主催：科研基盤研究C「狩野亨吉文書の調査を中心とした近代日本の知的ネットワークに関する基礎研究」

共催：東京大学駒場図書館

協力：東京大学駒場博物館



東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部



再景：狩野亨吉「一高入学式式辞」(明治32年9月)



## 狩野亨吉略歴

- 1 歳 慶応元(1865)年 7 月 28 日 出羽国秋田郡大館町三ノ丸にて誕生
- 4 歳 明治元(1868)年 戊辰戦争により被災、津軽藩領へ避難
- 5 歳 明治 2(1869)年 狩野家秋田に転任
- 10 歳 明治 7(1874)年 秋田県大平小学校入学
- 12 歳 明治 9(1876)年 狩野家東京に転任・番町小学校転入
- 13 歳 明治 10(1877)年 9 月 母千代子逝去(40 歳)
- 14 歳 明治 11(1878)年 7 月 番町小学校卒業
- 9 月 東京府第一中学校変則科入学
- 15 歳 明治 12(1879)年 9 月 東京府第一中学校退学。東京大学予備門入学(第 4 級第 2 組)
- 20 歳 明治 17(1884)年 7 月 東京大学予備門修了
- 9 月 東京大学理学部数学科入学
- 22 歳 明治 19(1886)年 10 月 家兄元吉逝去(29 歳)
- 24 歳 明治 21(1888)年 7 月 帝国大学理科大学(数学科)卒業
- 25 歳 明治 22(1889)年 9 月 帝国大学文科大学(哲学科)2 年次編入学
- 27 歳 明治 24(1891)年 7 月 帝国大学文科大学(哲学科)卒業
- 9 月 帝国大学大学院入学(菊地大麓、井上哲次郎、  
ルードヴィッヒ・ブッセに師事)
- 28 歳 明治 25(1892)年 7 月 帝国大学大学院退学、第四高等中学校教授任官
- 30 歳 明治 27(1894)年 3 月 第四高等中学校教授依願免官
- 34 歳 明治 31(1898)年 1 月 第五高等学校教授・教頭任官
- 11 月 第一高等学校校長任官
- 42 歳 明治 39(1906)年 7 月 京都帝国大学文科大学学長・教授任官
- 43 歳 明治 40(1907)年 10 月 文学博士学位授与
- 12 月 父良知逝去(79 歳)
- 44 歳 明治 41(1908)年 10 月 京都帝国大学文科大学教授依願免官。以後は鑑定で身を立てる
- 48 歳 大正元(1912)年 東北大学総長澤柳政太郎の周旋により、同大学図書館へ第 1 次  
「狩野文庫」納本
- 78 歳 昭和 17(1942)年 12 月 22 日 逝去

参照 八田三喜「狩野亨吉先生」『科学史研究』昭和 18(1943)年  
安倍能成『狩野亨吉遺文集』中央公論社、昭和 33(1958)年  
青江舜二郎『狩野亨吉の生涯』明治書院、昭和 62(1987)年等

## 明治30年代の一高

旧制第一高等学校の前身は明治7(1874)年の官立東京英語学校に遡る。明治10(1877)年の東京大学創立にあわせて東京開成学校普通科とともに東京大学予備門となり、明治19(1886)年に第一高等中学校、明治27年に第一高等学校と改称された。東京大学教養学部創立70周年の今年は、東京英語学校から数えれば145周年ということになる。なお、狩野亨吉校長は明治35(1902)年の卒業式の式辞で「既往二十五年間予備門時代ヨリ今年ニ至ル迄」と述べており、当時は予備門から数えることもあった（その数え方だと東京大学と同じく142周年）。

狩野亨吉は明治31(1898)年11月に校長として一高に着任した。一高が現在農学部のある本郷の弥生キャンパスに置かれていた頃である（駒場移転は昭和10(1935)年）。明治39(1906)年7月の退任までの約8年間は、一高にとって重要な出来事が多い。明治32(1899)年には初めて清国から一高に留学生を聴講生として迎える。翌33(1900)年には南・北・中の三寮が落成した。翌34(1901)年には一高医学部が独立して千葉医学専門学校となる。また、今も野球応援などで歌われる寮歌「嗚呼玉杯」（第12回記念祭東寮寮歌、矢野勘治作詞、楠正一作曲）は明治35(1902)年に作られた。翌36年には夏目漱石が英語嘱託として着任する。この年には35年入学の藤村操が「不可解」の言葉を残して華嚴の滝に身を投げるといふ事件が起きた。

明治30年代には、森田草平（33年）、岩波茂雄（34年）、安倍能成（35年）、吉田茂（37年）、谷崎潤一郎（38年）らが一高に入学している。岩波茂雄や安倍能成は狩野が一高を去った後も書簡を通して長く交流を続け、狩野の死後は約2万点に及ぶ書簡をはじめとする狩野亨吉文書の保管にも尽力した。後年、安倍能成編『狩野亨吉遺文集』（昭和42(1967)年）も岩波書店から刊行された。狩野文書は一高同窓会を経て現在は東京大学駒場図書館所蔵となり、今回展示するのはその一部である。

（田村 隆）

[明-1] プッチール氏銅像寄附に際しての謝辞 明治 35(1902)年 11 月 9 日 狩野亨吉作成  
ルヴェゾンヴェールの中庭に二体の胸像がある。二人とも一高の外国人教師で、右側は  
ドイツ語を教えたフリードリヒ・プッチール (1851～1901)。大坂七太郎 (=岡島辰五郎  
(1880～1962)) 作、沼田一雅 (1873～1954) 輔。一高で薫陶を受けた門弟からの寄贈に  
対する狩野校長の謝辞が残る。

[明-2] 故アリヴェー氏銅像建設費決算報告書 明治 37 (1904) 年 5 月

故アリヴェー氏銅像建設委員

左側の胸像はフランス語教師のジャン・バティスタ・アルチュール・アリヴェー (1846  
～1902)。原型作は後に桂浜の坂本龍馬像(昭和 3 年)を手がけた本山白雲(1871～1952)。  
「金四十円 東京美術学校ニ於ケル懸賞金」とあり、コンペが行われたのであろうか。  
鑄造は山本鹿洲・山本桃邨。

[明-3] 「一部三年三之組」卒業写真 明治 37 (1904) 年 5 月 宮内幸太郎撮影

明治 37 年 5 月の卒業写真。後列中央に、同年 1 月 16 日に除幕されたアリヴェー像が  
見える。場所は現在農学部がある弥生キャンパスで、周囲の木々や建物も決算報告書  
に同封された写真と一致する。前列中央に狩野亨吉校長が座る。

[明-4] 第一高等学校図書館絵葉書 (2 枚) 昭和 10 (1935) 年～25 年 第一高等学校か  
一高図書館 (今の駒場博物館) の絵葉書。左右の植え込みに本郷から移されたプッチ  
ール像・アリヴェー像とおぼしい胸像が見える。資料「明-2」の台座と比較すると、  
アリヴェー像は左側か。台座の一部は 102 号館裏の茂みに残る。図書館前のヒマラヤ  
スギも今よりずっと若い。



(左) アリヴェー像 (右) プッチール像  
(2019 年 6 月筆者撮影)



[明-5] 入学式式辞 明治 32 (1899) 年 9 月 狩野亨吉作成

狩野亨吉校長として初めて臨んだ入学式の式辞と見られる。当時は 9 月入学。明治 32 年から始まった清国留学生受入に触れ、「殊ニ今年ハ初メテ支那ノ留学生ヲ本校ニ入学セシメタル際ナレハ尤モ注意シテ善隣ノ道ヲ欠クコトナカラシムコトヲ務メヨ」と呼びかけている。

[明-6] 第一高等学校図書貸付券 (3 枚) 明治 34(1901)年 11 月 18 日・12 月 27 日

狩野亨吉作成

洋書 3 冊を狩野が借り出した際の貸付票。「K Kano」の署名と捺印が見える。書名は“The Elements of Euclid” (VC7)、“Sequel to Euclid” (VC8)、“History of Natural Science” (VI. G8)。請求記号の一致する 3 冊が今も駒場図書館一高文庫に所蔵される。

[明-7] 明治三十五年九月以降教官時間割 明治 35 (1902) 年 9 月

第一高等学校教官ごとに授業の担当時間割が示されている。「半ドン」の土曜日も含め、多くのコマ数を担当していたことがわかる。表中の数字はクラスを表し、たとえば「一・二・四」は「一部二年四之組」の略と思われる。

[明-8] 清国京師大学留学生ニ関スル第一年次報告書 明治 38 (1905) 年 1 月

第一高等学校清国留学生に関する明治 37 年度の報告書。入学試験の委員として、「英語」は夏目金之助 (漱石)、「日語」は杉敏介 (後の一高校長。『吾輩は猫である』の津木ピン助のモデル)、「歴史」には西洋史の原勝郎の名が見える。

(解説 田村隆)



[明-4] 第一高等学校図書館絵葉書 (個人蔵)  
右手の植え込みに写るのはブッチール像か

## 一 高生、藤村操とその自殺

藤村操 明治19(1886)年－明治36(1903)年

東京生れ、札幌育ち。第一高等学校一年級に在籍する生徒の一人だった。体格の良い、明るくおだやかな青年で、家族をよく思い友人からの評判も良かったという。

明治32(1899)年 札幌中学校の1年を終え、開成中学校へ通うため単身上京して母方の叔父、蘆野敬三郎の元へ。同年父親を亡くす。

明治34(1901)年4月 開成中学校3年を終えると、一学年飛ばして京北中学校5年に編入学。

明治35(1902)年9月 第一高等学校に入学。

明治36(1903)年5月 栃木県日光市にある華巖の滝へ投身自殺。

下に引用した「巖頭之感」は、藤村操の絶命の辞。彼が投身した滝の落ち口上部にある巨巖近くの木の幹に刻まれていた。傍らには硯、墨、ナイフ等が置いてあったという。

### 巖頭之感

悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす。ホレーショの哲学竟に何等のオーソリティーを備するものぞ。万有の真相は唯だ一言にして悉す、曰く「不可解」。我この恨を懐いて煩悶終に死を決するに至る。既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし。始めて知る大なる悲観は大なる樂觀に一致するを。

※「ホレーショ」とは『ハムレット』に登場するホレーショを指すとも言われる。

「日本ではじめて人間の存在の意味を求めて命を棄てた人間の、純粋な思想問題」(伊藤147頁)として藤村操の死は「巖頭之感」とともに大きな反響を巻き起こした。のちに一高校長となった哲学者・教育者の安倍能成、岩波書店創設者となる岩波茂雄など、当時同じく一高生であった者は多大な精神的衝撃を受けた。父方の叔父にあたる東洋史学者、那珂通世は『万朝報』に追悼文を掲載し、同誌の創刊者、黒岩涙香も「少年哲学者を弔す」を発表。各新聞はたびたび関連の事件をとりあげた。

参考 伊藤整『日本文壇史7 硯友社の時代終る』講談社、1964

平岩昭三『検証藤村操：華巖の滝投身自殺事件』不二出版、2003

(鶴田奈月)



藤村操 (青江舜二郎『狩野亨吉の生涯』明治書院、1974、178頁より)

[藤 - 1] 蘆野敬三郎書簡 1 明治 36(1903)年 5 月 24 日

狩野亨吉の大学時代の友人にして藤村操の叔父、蘆野敬三郎より送られた書簡。藤村操家出の3日後に書かれている。

〈翻刻〉 拝啓予テ学校ノ方ニテ御配慮被下候愚甥藤村操事廿一日ヨリ家出致し居手蔓ヲ逐ヒ搜索ノ結果華巖滝へ投身ノ事ニ判明致誠ニ面目無之次第ニ御座候……

[藤 - 2] 蘆野敬三郎書簡 2 明治 36(1903)年 7 月 10 日

7月はじめに発見された藤村操の亡骸は青山霊園に埋葬された。園内には今日でも「藤村操君絶命辞」の石碑が置かれている。

〈翻刻〉

拝啓藤村操ノ儀ニ付毎々御配慮被下奉深謝候。今般遺骸発見ニ付来十二日一時青山へ葬送ノ事ニ取計申候……

[藤 - 3] 「学生華巖の滝に投ず（那珂博士の甥）」『朝日新聞朝刊』

明治 36(1903)年 5 月 27 日

各紙は繰り返し藤村操に関連付けられる事柄を取り上げている。例えば、続出する後追い自殺、藤村操を名乗る人物から送られたとされる「操の書簡」の連載など。

[藤 - 4] 魚住影雄「自殺論」『校友会雑誌』第 137 号

明治 37(1904)年 5 月 第一高等学校校友会

魚住影雄が藤村操の自殺を受けて一高校内誌に書いた論説。校長の狩野亨吉は以下の箇所を塗りつぶすよう指示した。「其前に君国何かあらん、親と兄弟と朋友と何かあらん、我れ豈父母に乞ひて生れ来らんや、君国に誓ひて生れ来らんや。(後略)」(魚住影雄著;安倍能成編『折蘆遺稿』岩波書店、1914にて全文閲覧可)

[藤 - 5] 滑川豊水『ああ少年天才哲学者藤村操君の自殺 附 井上哲次郎小評』

昭和 45(1970)年序 鈴木印刷

表紙の写真は藤村操が華巖の滝に投身する前、傍の木に刻んだ「巖頭之感」。藤村操について書かれた書籍や記事はまま見られるが、中でも本書は非売品の貴重書。

[藤 - 6] 夏目金之助(漱石)葉書 年時不明(明治 39~41 年)

狩野亨吉に宛てた大塚保治らと連名の葉書。明治 36 年~40 年、夏目は一高で英語を教えていた。野上豊一郎によると、藤村操の投身を知った際、数日前に彼を叱りつけたことを気にかけてたという。

〈翻刻〉

此間の書物は三十円には負けないよ 夏目

(解説 鶴田奈月)



## 第二臨時教員養成所 ～一高における教員養成～

旧制第一高等学校といえば、帝国大学を頂点とする学歴エリートコースの登竜門として知られる。しかしその一高に、教員養成という全く異なる目的をもつ機関が共存した時期があった。日清戦争(1894～1895)後、就学率向上により教員の確保が急務とされていた。中学校・高等女学校・師範学校の教員養成は高等師範学校の役割だったが、従来の高師は東京の一枚しかなく、需要を満たさなかった。そこで明治 35(1902)年 4 月、これらの教員を速成するため、既存の官立学校 5 校に臨時教員養成所が付設された。

名称	付設先	学科	廃止年月
第一	東京帝国大学	国語漢文科・博物科	明治 39 年 3 月(国漢) 明治 41 年 3 月(博物)
第二	第一高等学校	物理化学科	明治 41 年 3 月
第三	第二高等学校(仙台)	英語科	大正 3 年 3 月
第四	第三高等学校(京都)	数学科	明治 39 年 3 月
第五	東京外国語学校	英語科	明治 39 年 3 月

当時、一高は修業年限 3 年、9 月入学・7 月卒業で、卒業生は無試験で帝国大学に進学した。第二臨時教員養成所は、入学資格が中学校卒業程度である点だけは一高と同じだが、その他は大きく異なっていた。修業年限は 2 年、4 月入学・3 月卒業であり、卒業生は各学科の教員免許を受けて各地へ赴任した。1 回あたりの定員はおよそ 20 人で、全員の卒業後に次回生を募集するという完全入替制をとった。授業料は無料だった。

養成所はこのように独自色の強い組織だったが、運営・設備などは全面的に一高が兼担した。一高校長狩野亨吉は養成所管理者を、一高教官たちは養成所講師を兼任して指導にあたった(本展示明-7 の明治 35 年度時間割のうち、「養」と書かれたコマが該当すると思われる)。また、福岡・佐賀・沖縄など各地の学校から、養成所卒業生を教員として採用したいという照会が寄せられ、狩野は適任者の推薦などをこなした。

明治 39 年 7 月、狩野は一高から京都帝国大学への転任に伴い、養成所管理者の任も終えた。一方、明治 35 年 9 月に広島高等師範学校が開校するなど、本来の教員養成機関である高師の拡充が進むにつれて、各養成所は順次廃止された。第二臨時教員養成所もわずか 6 年で廃止されたので、卒業生は 3 回 62 人にすぎない。しかし、第 2 回卒業生 25 人は連名で狩野に感謝状を送り、うち 24 人がその後も狩野との文通を続けている。一高だけでなく養成所においても、狩野は教育者として慕われたのだった。(川下俊文)

[臨-1] 臨時教員養成所設立二関スル書類 明治 35 (1902) 年 4 月以前

無署名 (狩野亨吉ほか) 作成

明治 35 (1902) 年 4 月、第一高等学校に第二臨時教員養成所が付設され、物理化学科教員の養成が始まった。本文書は養成所の学則・課程・担当講師 (一高教官が兼任) などの構想メモ。

[臨-2] 第二臨時教員養成所学生募集要項 明治 35 (1902) 年 4 月 22 日 狩野亨吉作成

養成所第一期生の入学試験の結果、合格者数は定員を満たさなかった。そのため狩野は各地の中学校長宛てに本要項を送り、卒業生のうち成績優秀者を推薦するよう依頼した。東京府宛 2 通、京都府宛 4 通存。

[臨-3] 生駒恭人書簡 明治 36 (1903) 年 12 月 13 日

生駒は沖縄県師範学校長。翌年 3 月卒業予定の第 1 回生を教員として採用したく、狩野に推薦を依頼した。ただしこの時は東京高師からの採用が決まり、生駒は狩野に詫び状を送っている。

〈翻刻〉

拝啓過日ハ參校ノ上御依頼申上候来三月卒業ノ理化教員一人五十円位ニテ聘用ノ件可成成立候様御依頼申上候且甚タ御迷惑ナカラ可成早速ニ御返事ヲ得度奉存候小生本日乗船帰沖仕候者右御依頼ノ為メ敬具

[臨-4] 飯島正之助書簡 明治 39 (1906) 年 1 月 22 日

飯島は一高数学教授で、幹事を兼任 (1899~1906)。本書簡では卒業間近の第 2 回生に小中学校を見学させるよう提案。物理学教授友田鎮三・英語教授畔柳都太郎の、養成所講師としての教えぶりも記されている。

〈翻刻〉

陳者教員養成所生徒既ニ卒業期ニ差迫候ニ付實際之授業法視察之目的にて各種学校參觀せしめ候事有益と存候尤授業法に慣れしむる目的にて物理学ニ於て友田講師第一学期に授くる所あり此第三学期に於ても何敷授ケらるゝ様の話を前方聞及居候また英語解釈を授くるに生徒をして講壇ニ立ちて講ぜしむる事を畔柳講師ハ実行致居候趣ニ候教育学教授法之方も既に余程進ミ候事と存候まゝ小中学校等之實際ニ付授業法を觀察せしむるに適當なる時機かと考候次第ニ御座候

[臨-5] 第二臨時教員養成所第2回卒業式式辞 明治39(1906)年3月 狩野亨吉作成  
養成所第2回卒業式の式辞草稿。卒業生が養成所で得た「学力智識」およびそれに伴う「能力特権」を、天皇皇后御真影の前で国家に対し証明するという内容。

[臨-6] 第二臨時教員養成所卒業生からの感謝状 明治40(1907)年4月

第2回卒業生一同

明治39(1906)年7月、狩野は一高校長辞任に伴い、養成所管理者の任も終えた。第2回卒業生一同は、狩野に感謝状と記念品の置時計を贈った。これに対する狩野の礼状の下書きも現存。

(解説 川下俊文)

## 狩野亨吉と一高医学部

かつて第一高等学校には医学部が併設されていた。

明治 20(1887)年 9 月 旧千葉県立医学校が第一高等中学校医学部となり、千葉県千葉に設立。

明治 27(1894)年 9 月 第一高等学校医学部と改称。

明治 34(1901)年 4 月 第一高等学校から独立、千葉医学専門学校(現千葉大学医学部)となる。

医学部トップの主事は長尾精一であり、日本住血吸虫の中間宿主ミヤイリガイを九州帝国大学教授時代に特定した宮入慶之助など一流の教師陣が教鞭を執っていた。彼らの授業内容は、今回展示した学生(池田章)のノートによって伝えられている。

第一高等中学校医学部そして第一高等学校医学部の歴史は 14 年弱あるが、狩野と医学部との関係は、明治 31(1898)年 11 月に狩野が一高校長として着任してから独立するまでの 2 年半しかない。このわずかな期間でも、狩野は医学部と友好的に付き合っていた様子がうかがえる。

例えば、振天府拝観。宮城内に建てられた日清戦争の戦勝記念品を収蔵する施設、振天府に赴く際、狩野は一高医学部の教師陣も誘っており、ほとんどの者が同行を希望している。狩野の振天府拝観は二度目であり、前年に訪れた際は、軍人劉永福の寝台や台湾独立活動のシンボルの黄虎旗、中国の魚雷などを目にし、印象深く日記に書き記している。

また、医学部の「生徒の墮落」「試験の不正」「教授の頽徳」に対する譴責記事が『万朝報』に掲載された時も、狩野は意見を求められている。『万朝報』に先ずは正誤文を送ったものの、掲載されなかったため、新聞紙条例違犯として訴訟するか、現状維持で静観するか、どちらが得策かを書簡で尋ねている。結局どのような対応が取られたのかは不明だが、狩野への信頼が垣間見える書簡である。

一高から分離した後も協力体制は続いており、一高で倫理学を担当していた桑木巖翼を、医学部の後身である千葉医学専門学校の嘱託に希望する旨、狩野は相談を受けている。

上記のような医学部への関与も、狩野の一高校長としての手腕をよく表しているのではないだろうか。

(丹羽みさと)

[医-1] 『医学部雑件』 明治 25 (1892) 年 6 月

生徒募集の文言と入試科目。歴史と地理は医学科のみ、博物、物理、化学は設問範囲が異なる。薬学科は明治 23 年 7 月に付設され、修業年数は 3 年であった (医学部の修業年数は 4 年)

[医-2] 学校分立 (長尾精一書簡 1) 明治 34(1901)年 4 月 2 日

一高医学部は千葉医学専門学校と改められ、新しい教育機関として再出発した。その翌日、これまでの厚情に感謝の意を示し、送られた手紙。両校の友好関係を示す。

〈翻刻〉

肅啓益御清榮賀奉候陳ハ今般学校分立相成候処是迄御庇護ニ依リ大過ナク勤務仕候段感謝之至ニ堪ヘズ尚不相変御眷顧之様奉希候何レ出京ノ節拝顔ヲ得テ万謝可仕候得共不取敢各謝意ヲ表シ度如斯ニ御座候敬具

[医-3] 教員囑託依頼 (長尾精一書簡 2) 明治 34(1901)年 8 月 10 日

本書簡は、千葉医学専門学校の校長となった長尾精一が、一高の倫理学教授である桑木巖翼に専門学校囑託を年額 300 円にて依頼したことを報告するもの。

〈翻刻〉

……報酬之義年額三百円ニテ御相談被下候間敷哉右ニテ桑木君承諾致呉候得は誠ニ好都合ニ御座候……

[医-4] 一高医学部受講ノート (婦人科学・長尾) 池田章作成

明治 26(1893)年から明治 31 (1898) 年にかけて第一高等中学校 (第一高等学校) 医学部に在籍した池田章(源作) によって記された受講ノート。池田は卒業後、三島市で池田医院を開院。地域医療の向上に努めた。

[医-5] 『万朝報』 明治 33(1900)年 10 月 14 日

「千葉に於る第一高等学校医学部の腐敗」として、「生徒の墮落・試験の不正・教授の頽徳」に対する譴責記事が 10 月 13 日から 20 日に掲載された。展示は、遊廓など諸処の歓楽施設に墮落生が見られることについての記事。

[医-6] 『万朝報』への対応 (長尾精一書簡 3) 明治 33(1900)年 10 月 25 日

千葉医学校の不祥事は「主事幹事の頽徳」に由来するとされた一連の記事に対して、長尾は狩野に意見を求めた。後日『万朝報』に正誤文を送ったものの、新聞紙条例に反して掲載されなかったため、今度の対応を問う手紙。

〈翻刻〉

……本月廿一日付ニテ書留郵便ヲ以テ正誤文ヲ投シ  
……遅クモ本日ノ該新聞ニ掲載スヘキヲ其儀無之然テ  
ハ今後ノ新聞ニ掲載可相成哉モ難斗候得共或ハ同條例  
第二十八條ノ処分ヲ甘シテ受ケル覚悟ニテ掲載セサル  
義ニハ無之歟果シテ然ラバ該條例違犯ノ廉ヲ以テ訴訟  
ヲ提起可致歟又ハ俣打捨置可申歟何分決兼候ニ付出校  
ノ上御意見承リ度存候

[医-7] 振天府絵葉書

明治 29 (1896) 年に建てられた日清戦争の戦勝記念品  
収蔵施設である振天府内の休憩所の写真と、収納品を  
示す絵葉書。狩野が見た「劉永福の榻床」「虎章独立旗」  
が描かれている。



[医-7] 振天府絵葉書 (個人蔵)

[医-8] 狩野亨吉校務日記 明治 32(1899)年 5 月 21 日 狩野亨吉作成

吹上御所にあった振天府を訪れた際の記録。客家出身の軍人劉永福の寝台や台湾の旗、  
中国の歓喜天像や魚雷を目にし、煙草を休憩の際に賜ったとあるが、狩野が喫煙をし  
たかどうかは不明。

〈翻刻〉

廿一日 午前十時参内 南溜ニ控……御東宮の西側の小口より出て二重橋を渡り西南  
に行くこと三町許り。門をくゞり又行くこと一町、吹上御園へ入る所の左の小高き所  
ニ新しき立ものあり。是分捕品を収たるところ也

台湾の部 劉永福の榻床 虎章独立旗

支那の部 聖天父母の像 魚形水雷

御休憩所ニテ煙草ヲ賜はる……

[医-9] 振天府拝観 (長尾精一書簡 4) 明治 33(1900)年 6 月 6 日

狩野は振天府再訪の際、一高医学部の教師陣を誘ったものと思われ、日時に関して学  
務との調整が図られている。当時教授職にあった者はほとんどが同行を希望したが、  
荻生録造、筒井八百珠、逸見文九郎の 3 名は不参加であった。

〈翻刻〉

拝啓陳ハ振天府拝観之件御申越被下奉謝候、拝観ヲ請候教授ハ左記之者ニ有之候……

(解説 丹羽みさと)



## 展 示 リ ス ト

NO : 資料名 / 制作年代 / 制作者(差出人名) / 請求記号(特記の無いものは駒場図書館蔵)

- 明-1 : プッチール氏銅像寄附に際しての謝辞 / 明治 35(1902)年 11 月 9 日 / 狩野亨吉 / 第 1 函 一高 1-(一)
- 明-2 : 故アリヴェー氏銅像建設費決算報告書 / 明治 37(1904)年 5 月 / 故アリヴェー氏銅像建設委員 / 第 7 函 ア-1
- 明-3 : 「一部三年三之組」卒業写真 / 明治 37(1904)年 5 月 / 宮内幸太郎撮影 / 東京大学駒場博物館蔵(12)J-27
- 明-4 : 第一高等学校図書館絵葉書(2 枚) / 昭和 10(1935)年~25 年 / 第一高等学校か / 個人蔵
- 明-5 : 入学式式辞 / 明治 32(1899)年 9 月 / 狩野亨吉 / 第 1 函 一高 2-(二)
- 明-6 : 第一高等学校図書貸付券(3 枚) / 明治 34(1901)年 11 月 18 日・12 月 27 日 / 狩野亨吉 / 第 2 函 一高 17-1
- 明-7 : 明治三十五年九月以降教官時間割 / 明治 35(1902)年 9 月 / 第一高等学校 / 第 1 函 一高 5-3
- 明-8 : 清国京師大学留学生ニ関スル第一年次報告書 / 明治 38(1905)年 1 月 / 第一高等学校 / 第 2 函 留学生 2
- 藤-1 : 蘆野敬三郎書簡 1 / 明治 36(1903)年 5 月 24 日 / 蘆野敬三郎 / 第 7 函 ア-55-E-6
- 藤-2 : 蘆野敬三郎書簡 2 / 明治 36(1903)年 7 月 10 日 / 蘆野敬三郎 / 第 7 函 ア-55-E-7
- 藤-3 : 学生華巖の滝に投ず(那珂博士の甥) / 明治 36(1903)年 5 月 27 日 朝日新聞朝刊
- 藤-4 : 「自殺論」『校友会雑誌』第 137 号 / 明治 37(1904)年 5 月 / 魚住影雄 / 第一高等学校校友会
- 藤-5 : 『ああ少年天才哲学者藤村操君の自殺 / 附 / 井上哲次郎小評』 / 昭和 45(1970)年序 / 滑川豊水編著 / 鈴木印刷
- 藤-6 : 夏目金之助葉書 / 不明(明治 39~41 年) / 夏目金之助 / 第 18 函 ナ-103-E-2
- 臨-1 : 臨時教員養成所設立ニ関スル書類 / 明治 35(1902)年 4 月以前 / 無署名(狩野亨吉ほか) / 第 1 函 一高 13
- 臨-2 : 第二臨時教員養成所学生募集要項 / 明治 35(1902)年 4 月 22 日 / 狩野亨吉 / 第 1 函 一高 13
- 臨-3 : 生駒恭人書簡 / 明治 36(1903)年 12 月 13 日 / 生駒恭人 / 第 7 函 イ-23-E-1
- 臨-4 : 飯島正之助書簡 / 明治 39(1906)年 1 月 22 日 / 飯島正之助 / 第 7 函 イ-48-E-14
- 臨-5 : 第二臨時教員養成所第 2 回卒業式式辞 / 明治 39(1906)年 3 月か / 狩野亨吉 / 第 1 函 一高 2-一高草(二)
- 臨-6 : 第二臨時教員養成所卒業生からの感謝状 / 明治 40(1907)年 4 月 / 第 2 回卒業生一同 / 第 2 函 謝状 8
- 医-1 : 『医学部雑件』 / 明治 25(1892)年 6 月 / 第一高等学校 / 東京大学駒場博物館蔵(2)II-30
- 医-2 : 学校分立(長尾精一書簡 1) / 明治 34(1901)年 4 月 2 日 / 長尾精一 / 第 18 函 ナ-16-E-6
- 医-3 : 教員囑託依頼(長尾精一書簡 2) / 明治 34(1901)年 8 月 10 日 / 長尾精一 / 第 18 函 ナ-16-E-10
- 医-4 : 一高医学部受講ノート(婦人科学・長尾) / 池田章 / 東京大学駒場博物館画像データベース
- 医-5 : 『万朝報』 / 明治 33(1900)年 10 月 14 日 / 朝報社
- 医-6 : 『万朝報』への対応(長尾精一書簡 3) / 明治 33(1900)年 10 月 25 日 / 長尾精一 / 第 18 函 ナ-16-E-4
- 医-7 : 振天府絵葉書 / 個人蔵
- 医-8 : 狩野亨吉校務日記 / 明治 32(1899)年 5 月 21 日 / 狩野亨吉 / 第 3 函 日記 9
- 医-9 : 振天府拝観(長尾精一書簡 4) / 明治 33(1900)年 6 月 6 日 / 長尾精一 / 第 18 函 ナ-16-E-2

編集 科研基盤研究C「狩野亨吉文書の調査を中心とした近代日本の知的ネットワークに関する基礎研究」

(田村隆・折茂克哉・丹羽みさと・川下俊文・鶴田奈月)

発行 令和元年7月1日